

方形周溝墓 壺棺は、殷民の子孫のものであろう。 古墳時代 255P 2,970P-1/2 河出 257P 壺棺 1809P-1/5 「古墳時代」255Pに記載あり 255Pには書かれていない

第五十一章 近畿地方の古墳

大和の弥生式文化の葬制は、少数の壺棺を除いて、また突明されていらないといわれている。

以下「古墳時代」(上)河出書房、二五五

三一八頁へ畿内およびその周辺へ森浩一・石

部正志、参照) 縄文晩期に渡来した

近畿地方の壺・甕棺墓は、扶余

系殷民の子孫等が小見を葬る際に用いたのだ

うう々々と思われる。既述

つまり、あれほど多くの弥生時代遺跡(集落)を

残した弥生人たちが、死後はどこへどのような

に葬られたのだろうか

という素朴な疑問に対して、実証的には現在

のところ答えられていない。このことは大

和だけでなく、畿内全般に共通する。

一方、

当初の弥生人の子孫達は、方形周溝墓

に葬られたのであろう

と考えてみたい。(第五章へ東国の戦死者)

第二十五章へ「方形周溝墓」の項において既述

とともに、あれ、今日の段階では

木に竹を接ぐ 570' 2971-3/2 159
 漸進 1268' 2,970-3/2
 長さ 161'

古墳時代

天正

古墳発生地域の地域は大和やその周辺であり
 内容において弥生後期からの継続である
 とするには、幾多の解決されなければならない
 障害がよこたわっている。
 大和の前期の墳墓は、
 と推定される。桜井茶臼山古墳でさえ、墳丘の
 規模は大きく、墳形は規格にのつとつた前方
 後円墳である。
 写真図版 543 へ桜井茶臼山古墳参照
 こ小らの大形の前方後円墳に先行するもの
 として、小形の円墳の存在を予想する人もい
 るが、この地域内では実在がみとめられてい
 ない。
 畿内における古墳文化は、漸進的でなく
 唐突に巨大なすかたを幾々の前にあらわ
 したのだった。(「古墳時代」(河出書房、二
 五七―二七七頁参照)
 すなわち、弥生時代後期と古墳時代初期との
 間に、明確なつながりが無く、――まるで、
 木に竹を接いだかのようにいきなり古墳時代へ
 突入した感がある。(巻頭の第3表参照)

*

■ それでは、この両者の間の大きな断絶は、何を意味しているのだろうか。

■ おそらく、いままで種々述べてきたよう

に、

「高塚式の古墳文化を持つ人々が、この

近畿地方を従属させた

ということを示唆しているのであろう。

■ さらに付言すると、

①九州地方の一隅、不知火海沿岸地域に安住の地を得た、太伯の後らと自称する者達は、

北九州地方の総支配者

ある箕子達から高塚式墳墓の築造法を学び、

その後やがて箕子達が支配していた北九州におよび

山口地方を奪い取り、ついに中国地

方・近畿地方をも併合した。

②北九州地方からやってきた倭人達は、この

新天地に、大型の規格にのっとった高塚式墳

墓を築いた。

のであううと思われ。(既述)

■ そうしたわけで、

「大和やその周辺では、弥生時代後期と、

大己貴命 新や(1) 113下
素戔鳴尊 新や(1) -109°下 13下
2.971^p - 3/2

⑤ 2470^p - 1/2

ニツセキ
忽然 2970^p - 3/2
いきなり

突然訪れる古墳時代とか、漸進的なつながり
方をしないの~~であらう~~。
と観察される。

米

導入

では、近畿地方に古墳文化が~~あ~~た~~た~~された
のは、一体、いつ頃の~~こと~~だったの~~だ~~ううか

すでに、第三十九章「荒陵」の項において
述べたとおり――先ず、三世紀中葉の頃

素戔鳴尊

須佐え男命等によって高塚式古墳が近畿地方
へ~~あ~~た~~た~~された可能性がある。

――しかし、たとえばであったとしても、公
素戔鳴尊の子孫である大己貴命らは――密かに

ほそと高塚式~~の~~墳墓を作り続けていったの
~~であらう~~。

倭国は、四世紀後半、倭国は中国を平定し
さらに出雲国(今の近畿地方)を譲り受けた

ように思われる。(第1.3表参照。既述)

それ以後、――中国地方(岡山周

河出 54^P
56^P

河出 54^P
河出 53^P
河出 59^P

2,972^P

河出 40^P
河出 42^P
河出 53^P
河出 2971^P
河出 1/2 1/1
河出 1302^P

2975^P
2/2 125^P
整

辺一 および近畿地方に、巨大な竪穴式古墳が、続々と数々の墳墓が造営されていったものと推察される。(第3回) 古墳形状の変遷系統図(参照)

↑↑↑↑↑ こうした地域では、前期からすでに、前方後円墳と前方後方墳の両方が造られていた。

なか、この頃には、せいぜい滋賀・岐阜・愛知・三重県が、分布の東限であつたと考えられる。(「古墳時代」(上)河出書房)

四二頁、五三頁、大塚初重、参照)

その後(五世紀頃か)北九州・瀬戸内・近畿地方に、このよう多くの出現し、また同時に、遠く関東地方から東北地方南半部へと波及する。

墳形の種類として、前方後方墳がめだつて多くなる。この基以上を数える。前方後方墳の半ば以上は、この時期の築造とみられる。

また、古墳の周囲に濠をめぐらせる様式もこの時期から始まつた。

2,973^P

こと

■さらに、埴輪はにめえん円筒列えんとうれつ、埴輪家はにめえん、きぬかさ、
埴はにめえん・鞍やきなどの器財きざい埴輪はにめえんを墳丘ふんきゅうにたてならべる
ことことも一般化いっぱんかするに至いたった、という。(「古
墳時代」(上)河出書房、五四～五六頁参照)

＊

こと

古墳の発掘が 造り出し 古墳時代は627, 11
日本古墳 100選 1967

2909-1/3 新へ

書きかえ 2909-1/3 末 2,974P
" - 2/3 中

応神・仁徳陵の築造年代について
[印] 応神天皇陵 [印] 仁徳天皇陵 は、四世

紀末から五世紀初めにかけ造られたものと
され、日本古代史の原点であるかのようにな
えられてきた。(第四十八章へ仁徳天皇の陵
の項において既述)

しかし、前方後円墳の型式変遷からいうと
「仁徳陵は、決して最古型式ではなく、む
しろ発展した形態の諸特徴をもっている」と
いう見解がある。(「陵の五王」藤間全大

岩波書店、ハ〇と八一頁。「古墳時代」(河
出書房、十一と十三頁参照)

そして、先にすでに述べた通り、

「仁徳陵は、五世紀前半に造営されたので
はなく、五世紀後半から六世紀にかけ
て造られたものではなかろうか」

と言われている。(第四十八章へ仁徳天皇
の陵の項において既述)

だが、この物語において、さらに時期を
繰り下げ、

「応神天皇陵も仁徳天皇陵も、聖徳太子への

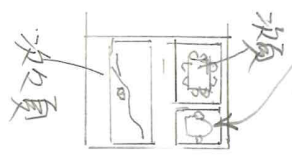
新ヤ(1)-61頁下
2.975P-1/7
2978-25 48
根柢の問はるる前頁7行 型式変更
ハセキ
タイトル
2903
マビシ
眉庇 2090
碗=腕 698
小村
46
ボストン美術館と鏡・刀の柄頭がある
40
由 124
1409
甲は83い

金人の夢告以後、つまり七世紀に入ってから
築造されたのであろう。
と考えてみたい。
第四十八章へ仁徳天皇の
陵の項において既述
*尚、もも心神・仁徳面陵墓の築造年代が
七世紀以降に大きくおぼつかず、
古墳の型式編年と実年代との噛み合わせが根
底から揺らぐことになった。
*特に畿内の古墳について、は、白紙に戻して
考え直す必要があるように思われる。
*「荒筋」第一編「古墳の変遷について」において既述
さて、明治五年九月七日、仁徳陵に土崩れ
が起り、前方部（腹部）から偶然、遺骸埋葬
施設が発見された。
それは、内部に長持形石棺を安置して、
竪穴式石室であった。そして、石棺の内側に
は、眉庇付冑、短甲、カラス碗などの副葬品
が置かれていた、という。（「日本古墳一〇
〇選」竹石健二、秋田書房、一九五五頁。『古
墳の発掘』森浩一、中公新書、三四頁参照）

写真図版 498・499へ心神・仁徳陵

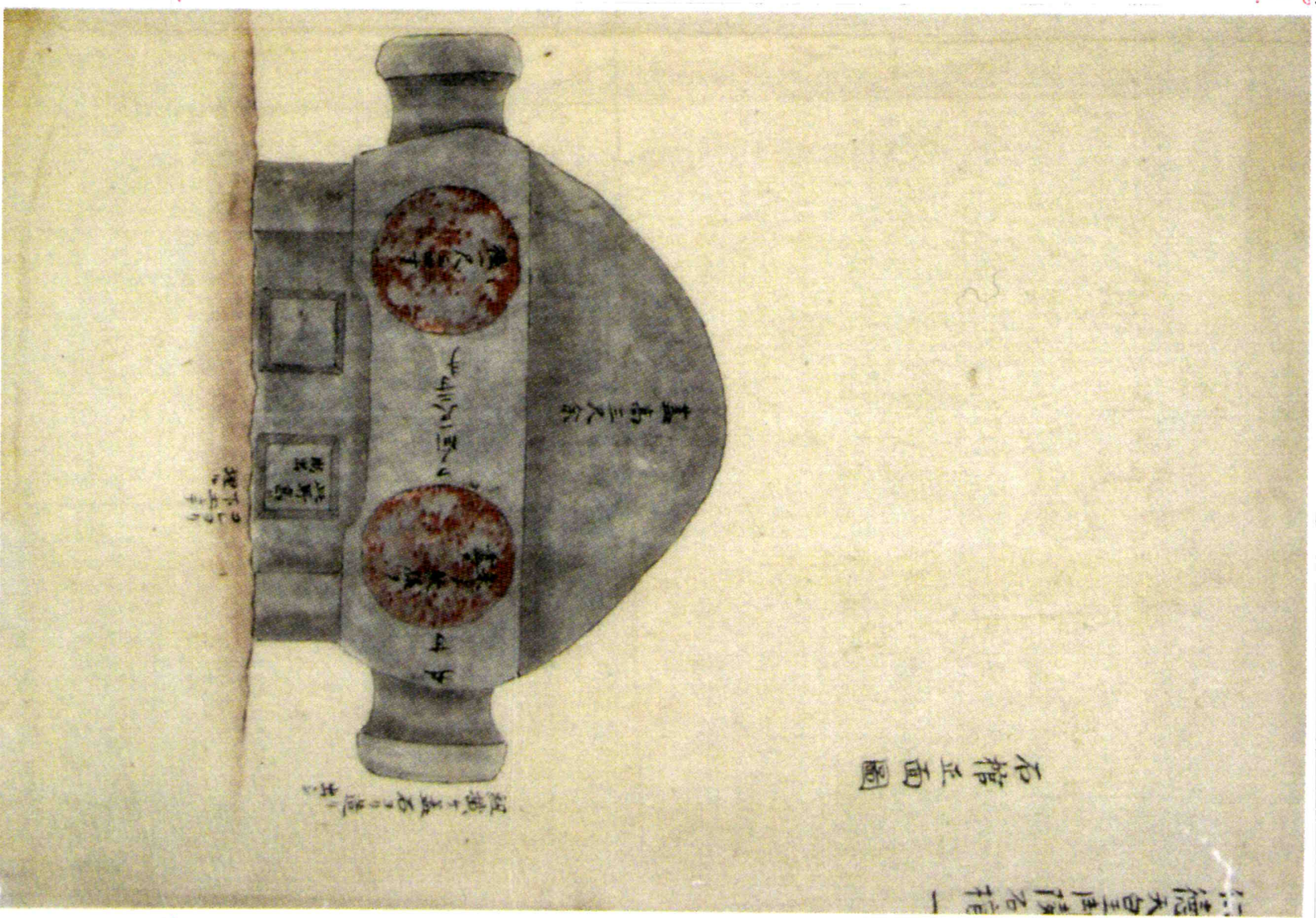
↑ 状のヨギル だけをとる
↓ (ほかのヨギルはズズ)

・カー 奥の右上隅
次頁と共に、
奥の上半分 限度一杯はみ出して
掲載下さい。



2.975^p - 2/7

2. 次頁の尺寸表に合わせて下さい。



石棺正面図

仁徳天皇陵出土石棺一

経典、森石、造り

埋下土より

ササガハシ

4ト

石棺

↑ カット

↑ カット

カ/カ

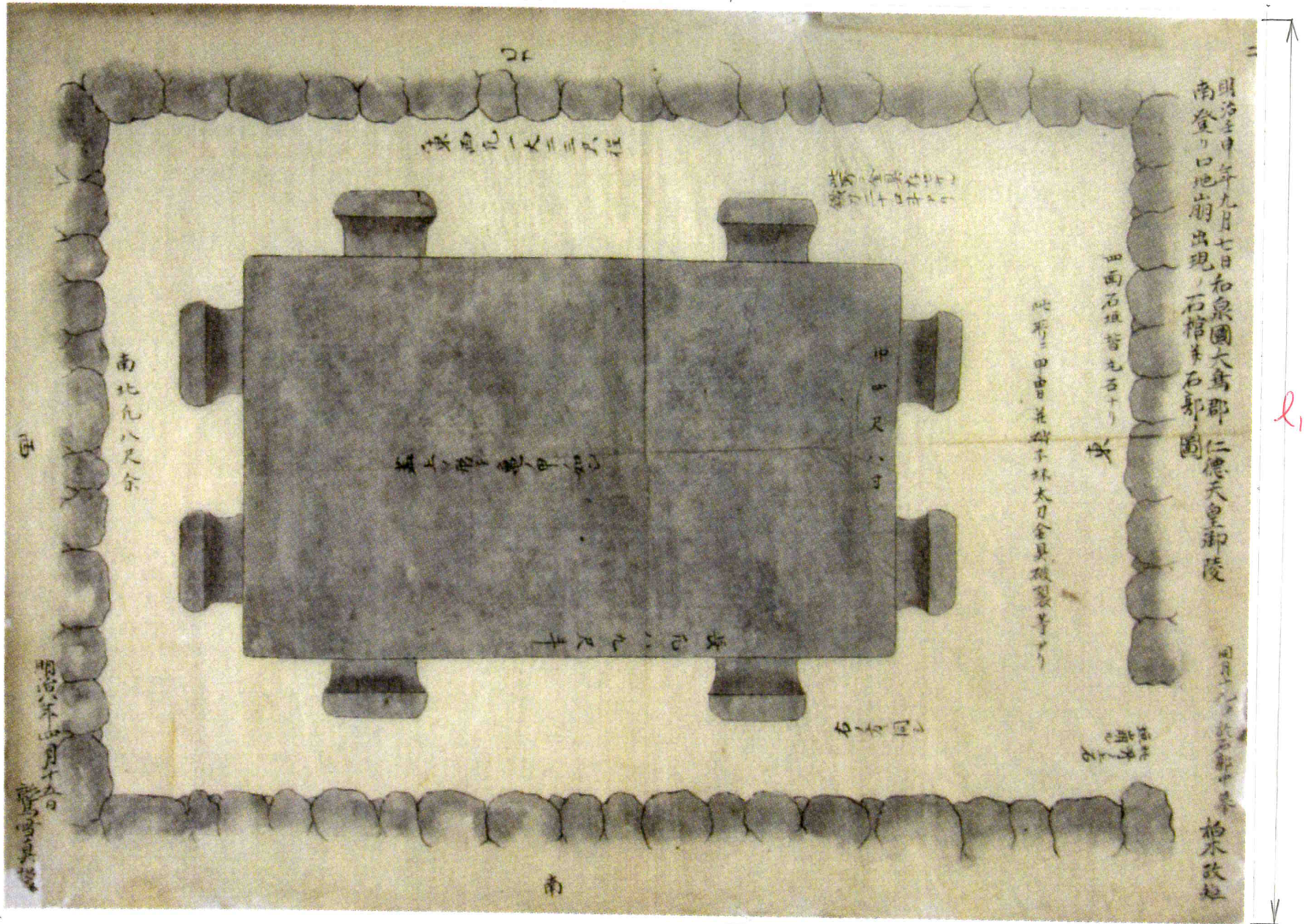
中心よりかけ
1424ゴ4

1224ゴ4 12243
右ウカ所蔵 / 堺市中央図書館

第394図 仁徳天皇陵出土石棺の正面図

2,975² 3/7

- ・カラー
- ・頁の左上
- ・左の隅一杯はみ出して掲載下さい。



中心
ふりわけ 142G

第395図 仁徳天皇陵 石槨上面と石槨内部の壁面
415

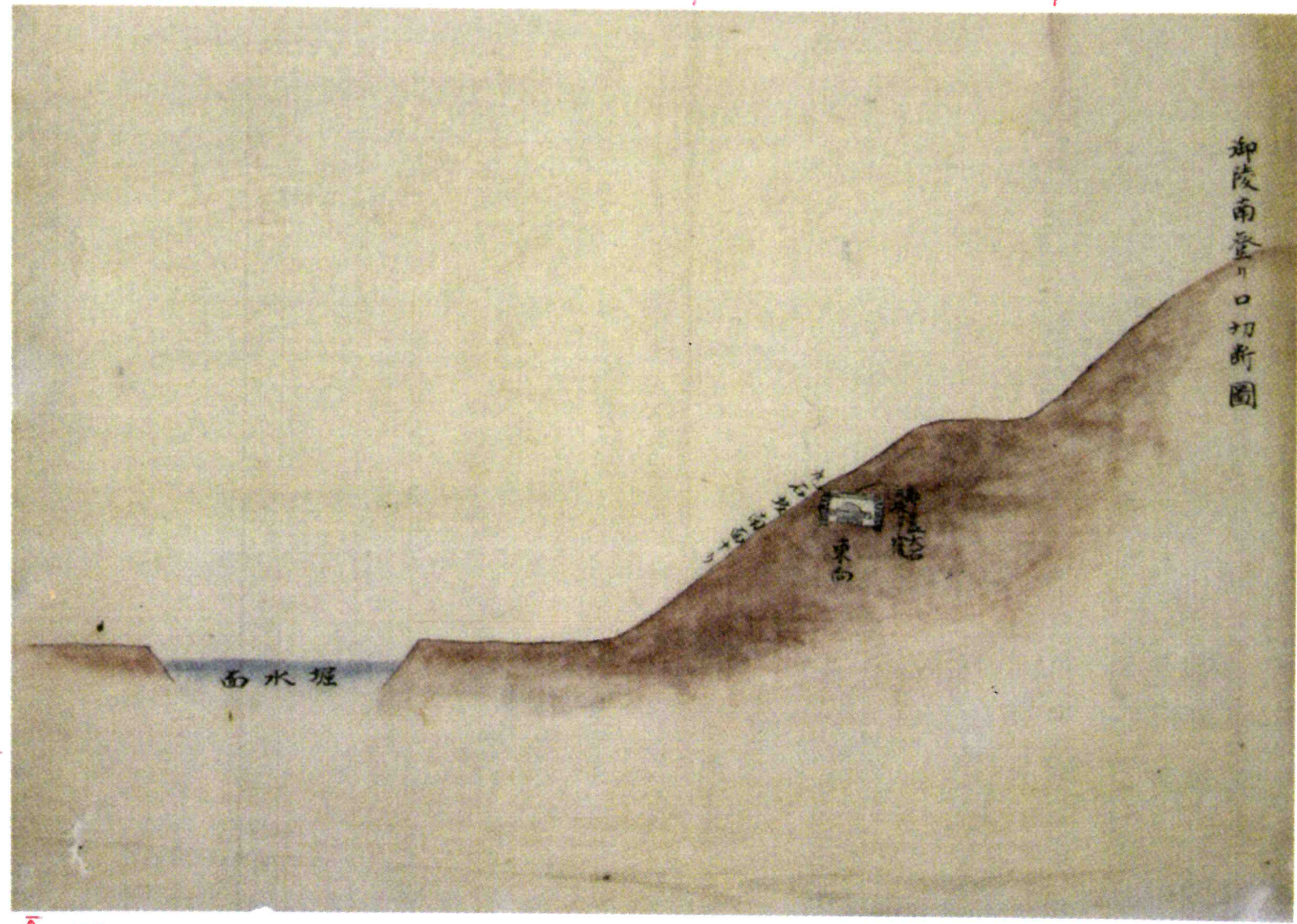
前頁のPの裏面に
合わせて下さい。

2,975⁺ 4/7
ママ

ママ ほかのヨゴレも全てママ。

- ・カラー
- ・頁の下。
- ・左右も限度一杯
はみ出させて
掲載下さい。

カット
↑



カット
↓

ゴ4
12QG
↑上げ3

中心よりわけ
13QG

右づめ 所蔵 / 八王子市郷土資料館

中心よりわけ
14QG

第396 図 仁徳天皇陵「御陵南登り口切断図」

『古墳に秘められた古代史の謎』 大塚初重監修、宝島社、2014年3月24日発行、74頁参照 (3図共)

明治5年 2975-1/4

2,975-5/7

2975-1/4 明治5年
前方部から発見

大阪府地図
新ヤ(1)-61頁下末

もつとも、次のようににも述べられている。
「仁徳天皇の埋葬施設は『いまだ不明であ
る。』
全堺詳志(一七五七年(宝暦七年))に「
日御廟は北峰(後円部)に有り、石の唐櫃
(石棺)あり、石の蓋長一丈五寸(三八セシ)ハ
幅五尺五寸(一六七セシ)ハ厚八寸(二四セシ)ハ
とある。
また、江戸時代前期の一六八五年(貞享二
年)、堺奉行・稻垣淡路守は、石棺の所在
場所について「杉生垣で六の間にわたり用
まれた中にある」と記載した。
これは、後円部最高所の塚状のところ、石
棺があったという記録であるが、いま確認
できない。
一方、明治五年(一八七二年)の大嵐で雨が
大量に降った際、大仙陵(仁徳陵)の前方部
前面の土が大きく崩れて石櫛(石室)が現れ
た(発見後ほどなく埋め戻された)とする
説も長年有力視されてきたが、最近では人為

2975^{P-1/4} 2.975^{P-6/7}
12行

的に掘り出されたのではないか、ともいわれる。

残っているスケッチによれば、石槨の大き

さは、長さ三六四、三九四、幅二四四、前後に

長持形石槨の蓋には、左右二個ずつ、前後に

二個ずつ合計八個の縄掛け突起があり、蓋の

屋根はカマボコ形である。

という。(「古墳に秘められた古代史の謎」

大塚初重監修「宝島社」二〇一四年三月二四

日発行「七四頁参照」

また「

「ボストン美術館」に、仁徳陵から出土した

と伝える立派な鏡や、刀の柄頭が所蔵されて

おり、明治五年に持ち出された可能性があ

る。石室内にあった甲や冑などは、模写してか

ら埋められ、二個のガラス器の存在は文

章で記録されてい

という。(「古墳に秘められた古代史の謎」

十五年十二月一日発行「四六頁参照」

昭和四

正 「法隆寺」町
77°, 79°

仏像の存在を利便
天つき
秋行

つくりだ
出来

写真は「古墳」森浩一表紙・1頁の前の説明
「古墳」森浩
森浩一 2.975P - 7/7
562.1.31(土) 2110P
2905-2/3-3

つまり、仁徳陵の遺骸埋葬施設は前方部に
設けられていた、というのである。
・大塚山仁徳陵においては、大塚山の後
円部が女人の口頭部、大塚山の前方部が女人
の口腹部とみなされたのであろう。第3図
・そして後代に造られたこの陵では、もはや
熊名等の儀式も必要のない為、作りやすい整
式石室にされた、という事なのかとも知れ
ない。
■なお、記紀の記述に威巖を添える為
へ仁徳天皇陵は、三条の整然とした
口周壕をめぐらせ、左右の西ウビレ部に社
状の口造り出し口を設け、美しくて壮大極
まりない御陵とされたのだろう。
と推察される。(写真図版499へ仁徳天皇陵参照)
*あえて述べると、仁徳天皇陵は、
へ仏像の太光背があるいは須弥山を取
りまく複数糸の海と山を意識して作られた
ようにも思えるか、いうまでもなく想像の域
を出るものではない。

*

トル

2,976^P-1/13

次頁
から

疑問視される諸天皇陵

高塚式たかづかの天皇陵てんかうりやうについて、こう言われている。

「神武天皇陵じんむてんかうりやうから孝元天皇陵かうげんてんかうりやう迄の各天皇陵

は、口人くひとが築きずいた古墳こふんでなく、たんなる

口山くやまであつて、考古学かうこくがくの対象たいしょうとなる遺跡いせきで

はない。

古墳研究こふんけんきゅうの対象たいしょうとなるのは、開化天皇陵かいけんてんかうりやう以

後、天武天皇陵てんむてんかうりやうまでである。

しかし、古墳こふんの型式編年けいしきへんねんの成果せいこと、天皇の

即位順そくいじゆんがおおよそ合致がっししているかどうかを検

討たうしてみるとき、あまりにも疑問ぎもんが多いよう

である。

という。へ「古墳こふんの発掘はつくわく」森浩一、中公新書

一四五（六頁参照）

一四五（六頁参照）

内さ、太い坪 高武山 地図、千城時代、近藤義市 293p上
いまろづか 朝日H139 21st
今城塚

5 file 2977P
天つき 太い坪 改行

2,976P-2/13

大坂 茨木市 280日

大坂 茨木市 2918-7/1st
継体天皇陵 早稲田
まだ早稲田

前頁

の允恭天皇（一四五四（記））の陵や墓山

例えは、古くから疑問をもたれていいる天皇陵

に、姿形の整った継体陵がある。写真図版 534 参照

茨木市の継体陵の外形は、河内古市古墳群

の墓山や允恭陵とほぼ同形同大であり、五世

紀中ごろに造られたものとみなされていいる。

そして、六世紀中ごろの五三一年前後に没

したらしい継体天皇の陵としては、東方二

ににある前方部が大きくひらいている今城塚（全

長一九〇m）の方が妥当である。写真図版 535 参照

学界では通説になっていいる。写真図版 535 参照

時代（上）河出書房、二九三頁参照）の石棺

↑↑↑参考迄に述べると、今城塚に熊本県

宇土市を中心とする一帯のピンク色の凝灰岩

が用いられていいるという。写真図版 536 参照

考古学者の間で継体天皇陵とされていいる

馬門石

2,976^p-3/13

・カラー

・右頁上半分に、
左右を限度一杯
はみ出させて
大きく掲載
下さい。

・暗くならないよう
に17下さい。
・明るくお願い
します。



・「いはらきの歴史を
探ろう」8頁に
継体陵写真有る。

・天皇陵史覧41頁に
茨木太田
とある

中心ふりわけ
130G

中心ふりわけ
140G

120G
右つめ

↑上げる

大阪府茨木市太田

3309-14
134

写真版534 継体天皇陵(太田茶臼山古墳)

※りたあつてき

『よみがえる大王墓・今城塚古墳』森田克行、新泉社、2011年8月15日発行、59頁参照。

は64 { 全長226mの前方後円墳。

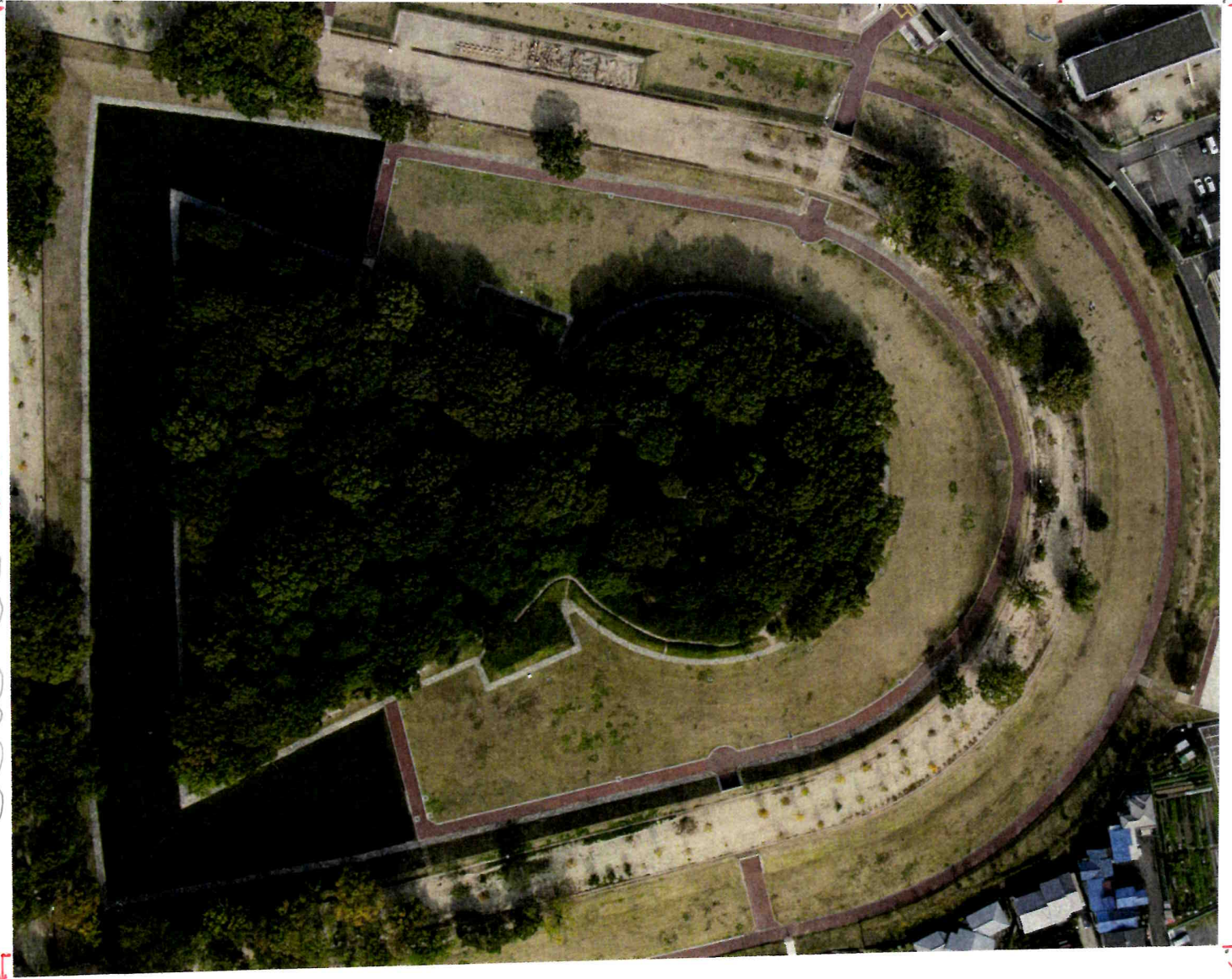
・後円部東北の外堤に置かれ、^{とく}たとみられる家・馬・鶴・甲冑などの形象埴輪が出土した。

422^p

・カラー
 ・左頁上半分に、
 上を限夜一杯はみ出させて
 掲載下さい。

出典
 明弘
 下

2,976^p - 4/13



↑カマ

↑カマ

中ページ
130p

中ページ
140p

写真図版535 今城塚古墳

120p 上
 大阪府高槻市郡家新町

古墳に秘められた古代史の謎 大塚初重監修 宝島社 2014年3月24日発行 11頁参照
 全長190mの前方後円墳

右下(1/4)

カット ←

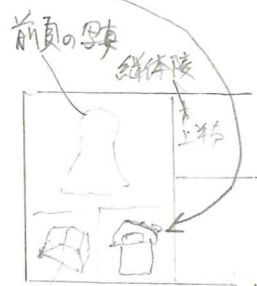
2,976P-5/13

→ カット



カット ↑

- ・カラー
- ・左頁の右下(1/4)に掲載下さい。



次頁の写真

- ・暗くならないようにして下さい。
- ・明るくお願いします。

↓

左・右両図の中心に
1309 向け。

中心に合わせ
1409 ←

写真図版536 滋賀県野洲市甲山古墳石棺(ピンク石棺)

↓ カット

424P

移動

『大王の棺を運ぶ実験航海』研究編 石棺文化研究会(宇土市教委内) 2007年10月13日発行 口絵(写真図版2葉共)

2,976^p- 6/13

カマト ←

→ カマト

・カラー

・左頁の左下↑
(1/4)に掲載
下さい。

カマト
↑



↓

↓

1424 写真図版 537 奈良県橿原市植山古墳東石棺 (ピンク石棺)
425

2,976P- 7/13

・カラー

右頁の上半分に、
大きく掲載して
下さい。



120G

中心よりかけ

140G

写真図版 538 馬門石石切場

今回の^{くりぬき}刳抜式石棺の採掘では、^{さいくつ}地下4mまで機械掘削にて、ようやく良質な石材が得られた。 426P

2,976^p-8/13

・カラー
・右頁の下半分は
大きく掲載して
下さい。

・暗くならないよう
に、注釈して
下さい。

・明るくお願ひ
します。



竜山石切場

1209

1409

写真図版 539 竜山石切場

2011/2976^p-1/4 1411

竜山石切場

・竜山石切場はきわめて大規模であり、現在もなお、商業ベースで採掘が続けられている。

1309 『よみがえる大王墓・今城塚古墳』 森田克行、新泉社、2011年8月15日発行、41頁参照 (上下2葉共)
427

2,976^P - 9/13

・カラー

・左頁の上半分と
大きく掲載して
下さい

この図の右下に、
次頁の写真も
載せて下さい。



大分県
台
便
多

1429

第397図 今城塚の石棺材、およびその他の

1394

石棺材産地

『よみがえる大王墓・今城塚古墳』森田克行、新泉社、2011年8月15日発行、74頁参照

1429

写真図版540 蓋用台船と曳航中の古代船

1229 2005年8月23日(神戸沖)

著作権許諾は
上たリ

・ピンク石棺(6,7ト)を載せた台船が、宇土市を出航、大阪南港に到着した。
『大王の棺を運ぶ実験航海』石棺文化研究会(宇土市教委内)に2007年10月13日発行の口絵。
『朝日新聞』平成17年8月27日付、〈石棺はるばる古代船が到着〉参照

- ・ カラー
- ・ 前頁の図面中の右下に配置して下さい。

2,976^冊 - 10/13

↑

↑
カット



タナリ トル

2005年8月23日(補正)

2,976^p 11/13

↑ カット

・カラー

・左頁の下半分に大きく掲載に下さい。

石棺を、もう少しピンク色にしておりてほしい。



大王の棺も埋め
実馬鞍状の
144頁にも
白馬の同様の
写真がある

ピンク石 (馬鞍石)

1409 写真図版 541 2005 年に今城塚でおこなわれた石棺修羅引きイベント

1209 重さ約 7t の石棺と重さ約 2t の修羅を市民ら約 400 人で曳ききった瞬間。

1309

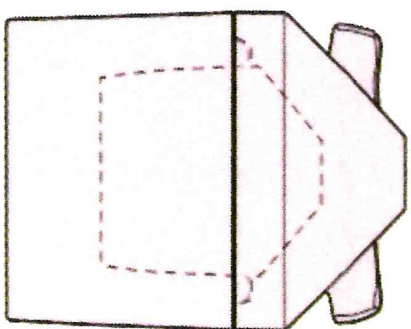
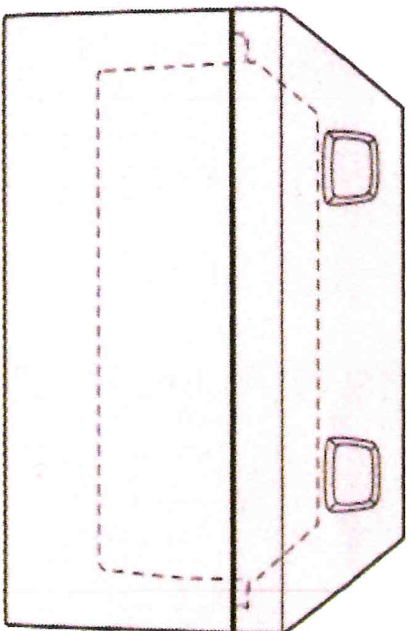
会場は砂ぼこりと見学者の歓声に包まれた。

『よみがえる大王墓・今城塚古墳』森田克行、新泉社、2011年8月15日発行、13頁参照。

・修羅と地面との間に『転』(堅くて丸い棒)を挿入すれば、簡単である。この当時の人が知らなかつたとは思えない。
(第8巻) 430

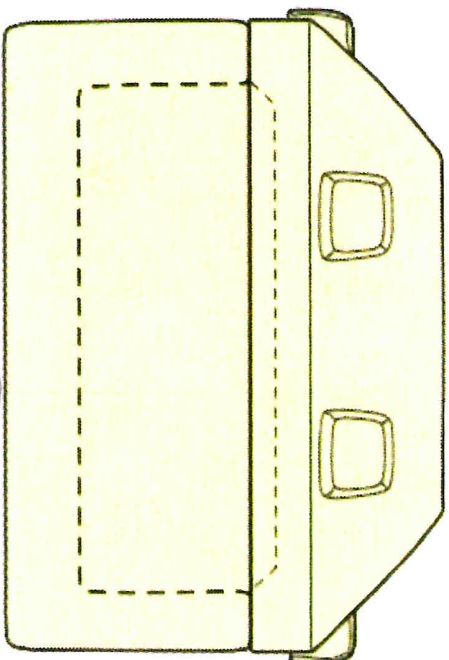
7X11

- ・カラー
- ・右側の左側に掘削下さい
- ・上へ階段一杯はみ出させて下さい。

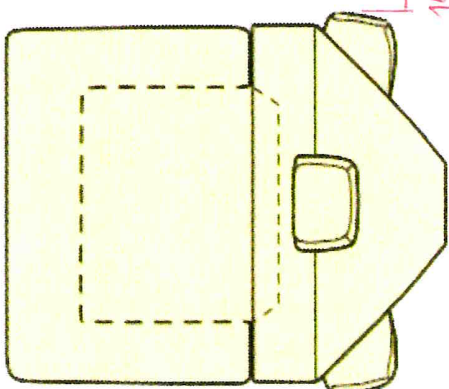


馬門石(ピンク石)製刳抜式家形石棺

7X11



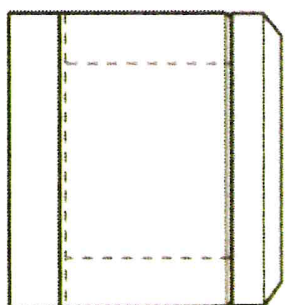
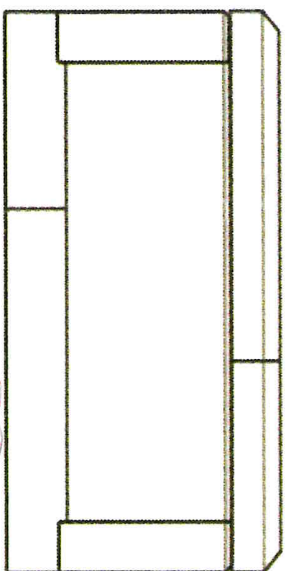
7X11



竜山石製刳抜式家形石棺

2,976^p-12/13

7X11



ニ上山白石製組合式家形石棺

中心よりわけ
140G

上げ3

上げ3

0 100cm

第398図 今城塚 3基の石棺の想定図

中心よりわけ
130G

120G

- ・出土した各石棺材から復元される石棺の規模は竜山石製が最大で、ついで馬門石製、ニ上山白石製となる。

『よみがえる大王墓』今城塚古墳 森田克行 新泉社 2011年8月5日発行 39頁参照